

「ミツバチ来てたよ、大調査」に参加しませんか

前号で紹介した「ミツバチ来てたよ、大調査」は、今年も継続中です。あなたもぜひ参加してみませんか？

みつばち百花 web サイトのトップページの「巣」(右図)の中から「ミツバチ来てたよ、大調査」の六角形をクリックして下さい。詳しい調査の参加方法や閲覧方法のマニュアルをダウンロードして

いただけます。クローズアップ撮影ができなくても、GPS 付きのカメラでなくても大丈夫。花とミツバチの種類がわかる画像であって、おおよその撮影地が特定できれば問題ありません。なお、この調査は、マルハナバチ国勢調査研究グループによる「マルハナバチ国勢調査」と提携しています。



水田での農薬被害は畦の花が原因？

ネオニコチノイド系農薬を、カメムシ防除の目的で散布する水田周辺では、以前からミツバチの農薬被害が報告されています。長期的な影響はないとの研究報告もありますが、やはり散布直後には巣門前に死体が積み重なります。

ミツバチは、夏の暑い時期には巣の冷却のために水田の水を集め、イネの花が咲けば花粉を集めに水田に入ります。ところが、実際にミツバチが大量に死ぬのは、イネの開花よりも後のこと。

水田の畦や周辺の農道脇には

さまざまな花が咲いています。イネへの農薬散布で、こうした花も汚染されます。もとより限られた蜜源・花粉源しかない水田地帯では、汚染されていても訪花してしまい、薬剤の影響を受けやすくなるようです。

耕作地がモノカルチャーだからと、農地の周囲に多様な花を植えるよりも、ある程度離れていて、まとまった広さのある耕作放棄地での植栽を選択した方がよいでしょう。とにかく、ミツバチと農薬との接点をどう減らすかがポイントになります。



イネは1日限りの花粉源、蜜源にも花粉源にもなるホワイトクローバーは、花期が長く、農薬の散布後にミツバチが利用することで、ミツバチと農薬との接点になっている可能性があります。

蜜源・花粉源植物データベース、公開中！

種子や苗の入手が容易な草花を中心に、蜜源・花粉源として利用できる植物について、現在、約300種の情報を収録・公開しています。植えつけ時期、開花時期、ガーデンでのミツバチの訪花状況なども記載しています。

くにたち蜜源ガーデンでは、さまざまな植物を植え、ミツバチの訪花を検証し、利用性を確認した上で、データベースに追加し、またブログでも情報を発信しています。ぜひ、ご覧ください。

- 花を増やそう！ 蜜源・花粉源データベース
- ◎蜜源・花粉源植物データベース <http://db.bee-happy.jp/>
- 花とミツバチの楽しい情報も満載しています。
- ◎みつばち百花ブログ <http://bee-happy.seesaa.net/>
- ◎日々の花とミツバチ情報 <https://www.facebook.com/beehappy100>



ラムズイヤー

みつばち百花事務局から

みつばち百花では、ミツバチをテーマに、ご要望に応じて楽しみながら自然科学を学び、体感できるセミナーや講座などをプロデュースしています。

ミツバチの生態のわかりやすい講話、楽しいキャンドルづくり、ハチミツのテイस्टィング「ワインのようにハチミツを楽しもう」、ミツバチと花の関係を知る「ハニーウォーク」などを行っています。また、国立市谷保で展開中の「くにたち蜜源ガーデン」の活動にも、ぜひご参加下さい。お問い合わせ、ご希望は、事務局あてにどうぞ。



LETTER FROM HONEYBEES

vol.5 2014



あなたの庭に、畑に、里山にみつばちは来ていますか？

A Thousand of Flowers for Bees

NPO みつばち百花
<http://bee-happy.jp/>

"Letter from Honeybees" はわたしたち「みつばち百花」から、ミツバチと花と人をつなぐ情報をお届けするニュースレター、今号は映画「みつばちの大地」特集です。

映画「みつばちの大地」

5月31日から東京、岩波ホールを皮切りに公開される、ミツバチを主題としたドキュメンタリー映画「みつばちの大地(原題: More than Honey)」を、私たち、みつばち百花も応援しています。

地球を4周、完成まで5年

イムホーフ監督の祖父は養蜂家、娘婿はオーストラリアのミツバチ研究者。ミツバチへの強い関心から、昨今のミツバチの大量死や減少を検証するため、地球を4周して取材を行ない、実に5年の歳月をかけて完成させたのが、本作品です。

取材地は、地元のミツバチを使う養蜂と、扱いやすい外来のミツバチを使う養蜂に分かれるスイス、以前は家族同様だったミツバチを、効率最優先の産業資材として扱うようになった養蜂家と、一方で、ダニへの耐性を持つアフリカの血を受け継いだ、より野生に近いミツバチに期待する養蜂家のいるアメリカ、女王蜂を作って世界各地へ輸出するオーストラリア、ミツバチの能力について先端的な研究を行っているドイツ、農薬でミツバチが死に絶えたので、リンゴの受粉を人手で行っている中国、人手を離れ、荒野で自立する原種に近いミツバチに未来を託す研究者のいるオーストラリアとなっています。

ロケ映像の合間に挿入される、ミツバチのクローズアップ映像は、CGを使わず、特殊な機材や撮影方法を駆使したもの。交尾のシーンなどは見応え充分です。



監督・脚本：マークス・イムホーフ / 編集：アンネ・ファビニ / 撮影：ヨーク・イエシエル、アッティラ・ボア
2012年ドイツ、オーストラリア、スイス合作作品(91分)
国内配給：株式会社 シグロ(2014)

幸福なミツバチが減っている

ミツバチが抱える問題の、直接的な原因となる、ダニや病気、それを防ぐための薬漬け状態、農薬散布、効率優先で「モノ」として扱われるミツバチなど、不幸な局面を描ききったこの映画が伝えるメッセージは、人間の文明が、ミツバチの野生を奪ったことが、すべての背景要因だということ。

メディアがよく書く「ミツバチが減っている」のは事実には反するようですが、この映画を見れば「幸福な」ミツバチが減っていることは実感として伝わります。全体を通じて、ミツバチを必要としているくせに、あくまで人間の都合に合わせて考え、扱う人々への批判に共感することでしょう。

ミツバチの「大地」の危機

しかし、みつばち百花の視点からは、この映画にも、もうひとつ何か抜け落ちている印象です。

ミツバチには、巣の周囲、半径約2kmほどの土地に、それぞれの季節に咲く花が不可欠。現状で、花は、十分に咲いているのでしょうか。多様な花に彩られているはずの「みつばちの大地」は、ミツバチが想定している豊かな大地ではなく、病んで、傷んでいるようです。

同じ土地に住んでいる私たちが、不幸なミツバチに同情しながらも、私たちの暮らしにもおおよびつつある危機を看過しているのではないかと、そんなことにも気づかせてくれる映画です。皆さんも、ぜひご覧になって、「生命のつながり」をいっしょに考えませんか？

レンゲ (紫雲英、マメ科 *Astragalus sinicus*)

日本でハチミツといえば「レンゲ」というほどの人気蜜源ですが、実は近年、レンゲハチミツの生産量は減ってきています。

レンゲの作付面積は、1970年の8万haから2010年には1万haにまで減少しました。さらに1980年代に日本に侵入したアルファルファタコソウムシによる食害が拡大し、また、水田での栽培では、開花前に緑肥として鋤き込まれてしまうなど、ミツバチがレンゲの花に出会う機会は、どんどんなくなってきています。 ※標準和名は「ゲンゲ」

誤解だらけのミツバチ情報

ミツバチは、私たちにとって身近な生き物ですが、それだけに不確かな情報や明らかに間違った言説が流布しています。インパクトのある流言はメディアが取り上げて、拡散されがちなので、私たちの関心もそこに吸い寄せられていき、「知識」として次第に定着していきます。

ミツバチに関心を持つのであれば、こうした誤解を解いておきましょう。

①ミツバチは減っている？

さまざまなメディア上で、「ミツバチの減少」という表現が使われています。統計上の数値で示されるのは人間が飼っているミツバチで、それぞれの地域の養蜂産業の盛衰に合わせて増減します。農産物の輸入に頼る先進国では減少傾向でも、途上国では増加中で、全世界的にはやはり増えています。日本でも、国産ハチミツへの関心が高まったここ10年ほどは微増傾向です。

ハチミツ生産だけでなく、農作物の受粉にも必要なミツバチ。メディアが指摘するような大きな減少があれば、私たちの食糧問題にも影響が現れ、具体的な対策が講じられてきたことでしょう。

この表現は、より正しくは、「幸福なミツバチが減少している」とするべきでしょう。

②農薬がすべての元凶？

日本では、ミツバチは農地の周辺の花を利用して、散布された農薬に暴露する「事故」も多数発生しています。しかし、養蜂家の努力もあって、農作物の受粉やハチミツ生産に必要なミツバチの需要はかろうじて満たされている現状です。

野生の二ホンミツバチへの農薬の影響はわかっていますが、昆虫全般の減少を考えると、影響は無視できないと考えるのが妥当でしょう。

農薬は、農作物の生産量や質を担保するためには不可欠です。害虫防除のために農薬を散布した場所にミツバチが行かないよう、蜜源・花粉源となる花を休耕地や耕作放棄地を利用して増やし、両者の接点を断れば、事故を未然に防ぎ、影響を最小限に抑えることができます。

③ミツバチは環境指標生物？

ミツバチが「環境指標生物」で、それを飼えるのだから、都会であれどこであれ、ミツバチにとっても、人にとってもよい環境だと発信している人たちがいます。

そもそも環境指標は、環境の変化に対する適応範囲が狭い生物を用いて、環境のわずかな悪化への反応から、環境の動きをとらえようというものです。

ミツバチは、巣に食糧を貯え、巣内の環境を自ら維持し、寿命の短い成虫を次々と入れ替え、環境のさまざまな変化に耐性が高く、環境指標性に乏しい生物です。

さらに、人がミツバチを飼っているということは、用意された巣箱に住み、条件が悪ければ餌をもらい、害敵からも守られます。それでは評価したい環境にミツバチが露出しているとすらいえないのです。

④二ホンミツバチは病気に強い？

二ホンミツバチを飼う人が増え、二ホンミツバチでの病気発生もしばしば報告されるようになりました。これまで、実はセイヨウミツバチに比べて病気に罹りにくい、あるいは耐性があるとされてきました。これは家畜種として飼われているセイヨウミツバチに比べ、野生種である二ホンミツバチでは異常を感知しにくいという事情によっていたものでしょう。

同じ場所で、同母系の二ホンミツバチを殖やすことで、近親交配が進み遺伝的な劣化が起きたり、あるいは巣箱ごと移動することで、病原の人為的な拡散・蔓延も進んできたと考えられます。

二ホンミツバチが病気に強いという誤解がなければ、早い時期に対策を講じることもできたかも知れません。